

討論

交野会員の東海村落の研究動向についての報告、川越会員、後藤会員による自らの研究史に即した報告ののち、牧野会員の司会で討論に入った。討論は、東海村落を中心にして近畿村落も含めた、関西地区における村落研究のあり方をめぐって展開した。

村落研究の現状を東海・近畿村落の研究という視点から、これまでの村落研究一般のあり方、それとの関連のなかでの東海・近畿村落の研究方向について、議論された。

日本経済の高度成長が村落に与えた影響、さらには七〇年代を、村落研究者がどのように評価し、総括しているのか、という問題を

軸に、議論はすすめられた。その問題は村落研究を主導する村研における「共通テーマ」にもかかわる事柄である。

共通テーマについては、現状の把握にとって共通の視座は重要ではあるが、その視座ではなくりきれないものに目を向けるなかで、全般的な問題のたて方を注意する必要があつたのではないか。なぜなら、その共通の視座でくくりきれないものが、たとえば、毎年の村研における共通テーマとは合わないズレを示す問題対象であるにしても、そうした共通テーマからズレた側面での研究は、共通テーマに対しても、ひいては学会としての村研のあり方にとって大きな活力になるであろう、という主張がなされた。この主張は、関西地区のむらの実態と研究をふまえた村落研究一般への視点であり、六〇・七〇年代をつうじて村研の共通テーマや村落研究の流れが、地域開発政策、農業政策などの政策や地方自治体の問題に焦点をおく傾向のなかで、むらの「解体」ということで議論がすすめられたことに対する、問題はそれがどの次元での「解体」であったのかをつきつめる必要がありはしなかつたか、あるレビューでは解体であつても別のレビューでは強固に残っている側面があり、それを解明する必要がある、という村落研究の現状への提言となつていて。この提言は、従来の東海村落の研究に対する提言ともなつていて、なぜなら、東海が戦後日本社会の先進的な問題状況におかれしたことであつて、その過程で政策問題への傾斜がみられ、実態に沈潜して村落を解明しようとする姿勢にやや欠けていたことも否めないからである。といつても、現在の村落研究において、政策論の重要性が

否定されるものではないが（たとえば、東海の平場農村における農民生活を規定づけている側面）、政策論の見地に立つさい、そうした政策が個性的な村落や農民にどのように受容され、新たな統合がつくり出されていくか、という過程への着眼が重要であることが述べられた。それは村落の特性を解説しようとする視角からの村落研究へのこだわりを示すことであり、その特性としての「近畿的なもの」や「東海村落の固有性」などの内容を明確にし、吟味するといふ作業ともつながることである、と考えられるからである。

ひとつの共通の視座に対してその視座では整理できない側面の解明が、重要な視座であることの主張には、六〇・七〇年代にかけて農民や農村に住む人の影（＝「生活」）が村落研究のなかで薄くなってきたことへの研究者としての自己批判もこめて、政策論でテーマを焦ることへの違和感や批判が表明され、今日的課題を追うあまり、村落独自の問題へのこだわりを欠き、けつかとして、むらの問題が研究テーマから積み残されたのではないか、という反省が出された。

また、今日、東海地方という発想で東海というエリアを把握しようとする研究がみられることにかんして質問が出され、こんごの東海村落の研究方向のひとつとして注目された。さらに、関西地区としての、研究者の側面、研究対象の側面を含んだ、共通性のなかにおいても、たとえば、東海村落には、近畿村落のように物質的な条件や基礎だけではその存続は説明できないとか、古いものが根づよく新しい変化にもかかわらず存続していく、という印象は薄いこと、

東海と近畿とではその変化の質がちがうこと、など村落の成立・形成の時期や性格にもとづいた近畿と東海の村落の差異が指摘された。そうした差異に拠つて村落に執着しながら、村落研究としてふまえるべき意味の解明の必要は東海と近畿で個々にあるけれども、上述のように関西地区として村落研究において相通するいくつかの問題についての認識や理解が示された。

(交野、古賀 記)